堀部安兵衛武庸

HORIBE YASUBE TAKETSUNE

新発田が生んだ剣豪、堀部安兵衛

元禄15(1702)年、主君の仇討ちのため赤穂浅野家浪士・四十七名の一人として吉良上野介の屋敷に討ち入り義挙を成し遂げた安兵衛は寛文10(1670)年5月、新発田藩士二百石取り中山弥次右衛門の嫡子として新発田外ヶ輪に生まれた。母は産後まもなく死去したため3歳まで母方の祖母、藩主溝口秀勝公の五女・糸姫(秋香院)に育てられた。

天和3(1683)年、父・弥次右衛門が辰巳櫓当直中の失火で兵具の合羽を焦がした責任を取り浪人となる。家族と共に妻の実家である溝口四郎兵衛宅に世話になるが、間もなく亡くなり、中山家の菩提寺である長徳寺に葬られた。これは安兵衛14歳の時である。3年後、安兵衛は、姉・きんの嫁ぎ先、庄瀬牛﨑村(旧白根市)の長井弥五左衛門宅で文武に励んだ。

元禄元年19歳の年、長徳寺に石代松を預け江戸に出府した。長徳寺の「堀部安兵衛手植えの松」はこの時に残したものと伝えられている。

元禄7年、叔父甥の義を結んだ菅野六郎左衛門と村上兄弟との高田馬場の決闘の助太刀で一躍名をあげる。その話を伝え聞いた浅野家家臣・堀部弥兵衛金丸の養子となり、名を應庸から武庸と改め浅野家家臣となった。

元禄14年3月14日、「松の大廊下」の刃傷事件で主君は即日切腹、赤穂藩はお取り潰しとなったが一方の吉良上野介には何のお咎めもなかった。幕府の御沙汰を不服とし、大石内蔵助をはじめとする赤穂浪士四十七人は、元禄15年12月14日、主君の仇討ちのため吉良邸に討ち入り念願の義挙を果たした。

元禄16年2月4日

「梓弓ためしにも引け武士の

道は迷わぬ跡と思はば」

安兵衛 辞世の句(34歳)

明治45年5月10日、福岡の頭山満、のちに中央義士会を創設した福本日南らの支援を受けて「義士銘々伝」で成功をおさめた浪曲界中興の祖・桃中軒雲右衛門が生誕地・新発田の長徳寺を訪れ、福岡の自宅に秘蔵する四十七士木像の寄贈を申し出た。そして大正2年2月4日、安兵衛を顕彰する「武庸会」が発足し、4月16日には、義士像が新発田に到着した。

昭和4年4月3日、この義士像を納める「義士堂」が完成し、内部には十三代溝口直亮公の書を中心に建設に賛同した後の元師・陸軍大将の武藤信義、政治家では首相経験者の若槻禮次郎、新発田出身の高橋光威、芸術家では会津八一、相馬御風、他の「書画」60点が格天井や壁に納められている。

昭和45年、泉岳寺に四十七士の生誕地の石で碑を建てる計画があり、新発田からは古寺石が三条市の関・佐藤氏と新発田市の佐久間・石井氏の縁により贈られた。更にこの石にノーベル文学賞を受賞した川端康成直筆の「由有縁有」が、堀部家の子孫から堀部の名前を使うことを許された「堀部石材店」によって刻まれた。現在も四十七士の墓所を見下ろす慈航観音霊験堂(非公開)の脇に他の義士の碑と共に建てられている。

平成24年5月

小 治

人間、安兵衛が大切にしたこと…。
それは生誕の地・新発田に秘められている。

新たに解明された安兵衛の家族の謎と、佐藤條右衛門の出自

中山安兵衛は、青春時代、姉きんの嫁ぎ先である牛崎村（現在の新潟市南区）の長井家六代弥五左衛門の家に寄宿していた。長井家の二代清左衛門は、新発田城の縄張り(注1)をした人物で、初代新発田藩主、溝口秀勝侯の奥方の兄弟にあたる。安兵衛の母方の祖母、糸姫は、秀勝侯の五女である。

しかし、安兵衛が切腹直前に幕府へ提出した親類書にも、堀部家に養子に入る際に出した親類書にも、姉きんの名は書かれていない。実は、安兵衛の長姉と思われていたちよが、父、弥次右衛門の先妻であり、安兵衛の実母は後妻だったことが判明した。きんは、安兵衛の腹違いの姉だったわけである。そのため親類書には書かなかったものと思われる。

きんの長男、松之助（七代弥五左衛門）の子孫が、安兵衛が当時所持していた刀と、安兵衛から長井家へ宛てた手紙2通を新発田市に寄附したことは良く知られているが、末娘ばんが、新発田町検断(注2)石川与治兵衛に嫁ぎ、その子孫が現在も新発田市に住んでいることは殆ど知られていない。ばんは、石川小路を通り、武庸橋で新発田川を渡って、長徳寺に眠る母方の祖父母（弥次右衛門とちよ）の墓に香華（こうげ）を手向けたことであろう。

牛崎の長井家墓地の中央に、明治8年に四代弥五右衛門の墓が再建されたが、最近になって、この墓に安兵衛のことが記されていることが発見された。おそらく安兵衛のことを記した石碑としては、高田馬場の石碑より古く、最古のものであろう。

吉良邸討入りの実況見聞録(注3)を書き残した安兵衛従弟の佐藤條右衛門は、安兵衛の友人、佐藤新五右衛門と同一人物である。安兵衛は、堀部家に提出した親類書の最後に「従弟」として新五右衛門の名を書いている。

安兵衛の記録によれば、佐藤新五右衛門について次の事柄がわかっている。

①母方の祖父は佐藤七右衛門といい、村上藩主、堀直寄（なおより）侯の家臣で知行千石鉄砲頭である。
②祖父七右衛門の名跡を継いで、佐藤と名乗った。
③兄は、小須戸（現在の新潟市秋葉区）の坂井与次兵衛である。
④姉は戸頭（現在の新潟市南区）の長井三郎左衛門の妻である。
⑤この姉の弟、僧恵芳（えほう）は、江戸の安兵衛を度々訪ねている。

以上の5点をもとに新五右衛門の出自を調べると、戸頭の中ノ口組大庄屋長井家の家譜には、六代三郎左衛門の妻は小須戸組大庄屋坂井家から嫁いできたことが記載されている。また、新五右衛門の実家は小須戸組大庄屋の坂井家であり、父は二代瀬兵衛、兄は三代与次兵衛であることが、坂井家の系図からも確かめられる。次の写真は、小須戸の茂林寺にある坂井家の墓地であり、右の五輪塔は父瀬兵衛、左の五輪塔は兄与次兵衛の墓標である。

②の「祖父の名跡を継ぎ、佐藤と名乗った」という記録から、新五右衛門の母が佐藤七右衛門の娘であることがわかる。さらに生家は坂井家であるが、祖父の佐藤家に養子に入ったこともわかる。

直寄侯から物頭29名に宛てた書状の宛名にその名が見えることから、佐藤七右衛門が村上藩士だったことも間違いはない。さらに、七右衛門は、堀直寄侯が飯山五万石の城主だった時には家臣であり、驚くことに、慶長20年の大坂夏の陣では敵将の首二つをとったという記録もある。

安兵衛の姉きんが嫁いだ牛崎の長井家の分家が、戸頭の中ノ口組大庄屋の長井三郎左衛門家であり、安兵衛は江戸へ上る前、この長井家にも世話になっていた。その折、三郎左衛門に嫁いだ姉を度々訪ねてきた佐藤新五右衛門と意気投合して兄弟同然に親しくなり、お互いに従弟の契約をしたのである。

ところが、大庄屋長井家の分家から家譜の覚書きに、坂井瀬兵衛とその後妻、佐藤七右衛門女との間に生まれた8人の子供のことを書いてあることが、最近になって発見された。それによると、第1男が与次兵衛、小須戸組大庄屋、第2女が長井三郎左衛門妻、中ノ口組大庄屋、第4男が佐藤覚兵衛、鯖江家中、第6男が吉祥寺、橋田村、とある。

第4男こそ佐藤新五右衛門であることは疑う余地がない。すなわち、吉良邸討入りの時は條右衛門と名乗っていたが、その後六代将軍家宣の時代、側用人となった間部詮房（まなべあきふさ）に、覚兵衛と名乗って仕官したものと考えられる。覚兵衛は、享保6年、間部家が村上から鯖江（現在の福井県鯖江市）に移る行列の中に「挨拶人」として出ており、鯖江に行ってからは町奉行にまで出世し、嫡子、猪之助もいる。

第6男の吉祥寺、橋田村が僧恵芳であることも間違いない。事実、恵芳は五泉の吉祥寺の十六世であり、享保2年から享保7年まで住職をしていたことが判明した。

以上によって、佐藤條右衛門の出自は完全に解明されたのである。

平成24年9月

新潟大学名誉教授　冨澤 信明

注1）城の堀、門、虎口等の配置を決めること。注2）当時、警察の役割を担った職務。注3）「佐藤條右衛門覚書」